

田村道夫* 日本産キツネノボタン群の学名

Michio TAMURA : *Ranunculus cantoniensis* Group in Japan.

キツネノボタンは日本のいたるところの水田や水流のそばの湿ったところに生えるものもありふれた雑草の一つである。しかし、日本の植物で、これほど学名の混乱したものも少ないであろうと思われ、*Ranunculus ternatus*, *R. vernyi*, *R. glaber*, *R. quelpaertensis* など、いろいろな学名がこの植物に当てられてきた。筆者も長い間この問題には関心をもってきたが、昨年と今年にエチンバラ王立植物園、キュー王立植物園、大英博物館、バリ自然史博物館などを訪れた機会に、キツネノボタンの類縁群について調べてみたので、つぎに、その結果をのべてみたい。その期間を通じてあらゆる便宜をはかっていただいたエチンバラ王立植物園の L. A. LAUENER 氏に深く謝意を表したい。

キツネノボタンの学名として広く用いられてきた *Ranunculus ternatus* THUNB. (1784) については、すでに中井 (1928)、原 (1942, 1955)、大井 (1954) らによって詳しくのべられてきた。要するに、1820年に DELESSERT が *R. ternatus* THUNB. として図示発表したジュネブの標本がキツネノボタンであるとみなされ、一方、1824年に THUNBERG 自身によって *R. ternatus* として図示発表されたウブサラの標本はヒキノカサである。また、これの原記載には“calycibus reflexis がくは反曲する”とあり、これはキツネノボタンの仲間の特徴である。したがって、原著者の THUNBERG は両種を混同しており、それを正して一方にその名を残した最初の著者は DELESSERT であるという解釈が *R. ternatus* THUNB. をキツネノボタンの学名として用いる場合の根拠である。しかし、その名はヒキノカサに残すべきであるという意見もある。しかも、大井 (1954) によって明らかにされたように、DELESSERT によって図示されたジュネブの標本はキツネノボタンではなく、シマキツネノボタンであると思う。いずれにせよ、*R. ternatus* の名はキツネノボタンには使いにくくなってきた。

**R. ternatus* THUNB. の名の取扱いについては、中井 (1928) は全く除いてしまうことを主張し、大井も適用を保留するよう提案している。適法名を無暗に廃棄すべきでないことは当然であるが、このような混乱のひどい名はやはり用いない方がよいと思う。どの程度の混乱で名を破棄するのかという規準を示すことは大変難しいが、例えばヨーロッパのレイジンソウの仲間でもっとも古い名である *Aconitum lycoctonum* L. や *A. pyrenaicum* L. などの名は、Flora Europaea では用いられていない。

R. ternatus の名を用いないとすればヒキノカサの学名は *R. extorris* HANCE である。キツネノボタンの学名として中井 (1928) が代りにとりあげた *R. vernyi* FRANCH. et

* 大阪大学教養部生物学教室 Institute of Biology, College of General Education
Ôsaka University, Ôsaka.



Ranunculus silerifolius LÉV. のホロタイプ

SAVAT. (1874) は、より前に小泉 (1925) によっても用いられている。これは明らかにキツネノボタンであるが、記載をとまなわない裸名で正当ではない。

R. glaber (LÉV.) MAKINO (1931) の発表には *R. ternatus* *a. glaber* LÉV. (1900) が基礎として引用されているが、LÉVEILLÉ はこの変種名に記載を与えておらず、多分1899年に H. BOISSIEU が発表した *R. ternatus* *β. var. glaber* を引用したと考えられ、この学名は *R. glaber* (H. BOISS.) MAKINO として引用されるべきであると思われるが、いずれにせよ次の組換え名よりも遅い。

キツネノボタンの学名として最近もっともふつうに用いられているのは *R. quelpaertensis* (LÉV.) NAKAI (1913) である。この組換え名の基礎になった *R. repens* *var. quelpaertensis* LÉV. のタイプは韓国の済州島で採集された FAURIE 1734 でホロタイプはエヂンバラ王立植物園にイソタイプは京都大学にあり、明らかにキツネノボタン、細かくいうなれば、ヤマノキツネノボタンの型である。しかし、この組換え名よりも前にキツネノボタンにあてられた名がある。

それは *R. silerifolius* LÉV. (1909) で、CAVALERIE が中国：貴州省の Pinfa で採集した標本によっている。HANDEL-MAZZETTI (1931) はこれを *R. langsdorffii* SPRENG., のちに (1939) *R. cantoniensis* DC. すなわち、ケキツネノボタンの異名としているが、エヂンバラ王立植物園にあるタイプ (CAVALERIE 2792) は明らかにキツネノボタンで、雌蕊の先端の嘴は強く鉤曲している。茎は直立して太さ6mmくらいあり、中部以下には真直な白い伏毛がある。葉は3出複葉で、中小葉は3浅裂、側小葉は2深裂し、先端は鈍く、鋸歯があり、両面に真直な白い伏毛がある。がく片は反曲し、花弁は長楕円形でがく片より少し長い。ただ、LÉVEILLÉ の記載には “receptaculo glabro 花床無毛” とあるが、これは間違いで、タイプの花床には剛毛が生えている。このように、この植物は、多少、葉の毛が多いようではあるが、普通にみられる茎に毛の生えたキツネノボタンである。

キツネノボタンの中国での分布は今までよく解らなかつた。日本でこれほど普通なものだが、中国にない筈がないのであるが、文献では非常に調べ難い。それは、キツネノボタンとケキツネノボタンとが混同されていたからで、たとえば HANDEL-MAZZETTI (1931) がケキツネノボタン *R. langsdorffii* SPRENG. と同定した標本はほとんどがキツネノボタンである。

さらに、ジャワヤスマトラの山地 (600 - 2200m) に分布する *R. sundaicus* (BACKER) H. EICHLER (1958) も、閉果の嘴が鉤曲する。全体がしばしば大形となり、花床の毛がときに少なくなることもあるが、キツネノボタンと充分に区別できるものではないし、また、*R. laxis* MERR. もこれによく似ている。

中井 (1928) はケキツネノボタンをキツネノボタンより充分に区別していたとは思われない。小泉 (1930) は変種のレベルではあるがこれを区別してオニキツネノボタンの和名を与えた。牧野 (1931) はこれを別種として区別し、ケキツネノボタンと呼んだ。したがって、和名の選択も先取権の原則を適用すべしとの立場からすれば、オニキツネノボタンを用いるべきである。

R. japonicus LANGSD. ex FISCH. (1824) は、*R. japonicus* THUNB. (1784) すなわちキンボウゲの学名の異物同名で不適法であるが、中井はこれを組みかえて *R. vernyi* var. *japonicus* (LANGSD.) NAKAI としてキツネノボタンの毛のある型 (実はケキツネノボタン) に用いた。この名はのちに *R. langsdorfii* SPRENG. とあらためられたが、すでに小泉 (1941) によって明らかにされたように、このタイプはシマキツネボタンであってキツネノボタンまたはケキツネノボタンではない。

R. petiolatus LÉV. et VAN. (1906) は標本の引用なしに記載されており、これは筆者 (1956) がすでに記したようにオトコゼリである。LAUENER & GREEN (1961) はこれをケキツネノボタンとみなしているが、かれらがタイプと考えたエチンバラ王立植物園に所蔵されている濟州島よりの標本 (TAQUET 528) には、*R. petiolatus* であるという標本に示された根拠はない。LÉVELLÉ & VANIOT がこの植物を発表したのは “Nouvelles Renonculacées Japonaises 日本産キンボウゲ科の新植物” と題する論文であるが、ここで *R. petiolatus* と同時に発表した植物はすべて FAURIE が1905年の6月より9月にかけて採集した6934番より6959番までの日本産の標本によっており、TAQUETの標本や韓国の植物は含まれていない。したがって TAQUET 528 をこれのレクトタイプに選ぶのは正しくない。京都大学にある FAURIE が駒ヶ岳で採集したオトコゼリの標本の採集の日付けは1905年7月であり、標本番号は6958であり、これをレクトタイプとするべきである。

沖縄県の西表島、仲良川上流より *R. iriomotensis* MASAM. (1939) という種が記載されている。これは台湾大学にあるタイプを調べてみると、葉の形や閉果の嘴が鉤曲するところはキツネノボタンと同じであるが、ただ、閉果は大きくて長さ6mm巾3mmに達し、また、縁がひろくてシマキツネノボタンの閉果に似たところもある。琉球列島のあちこちや、伊豆諸島にもこれに似たものがあり、多少問題はあるが、一応、キツネノボタンとみなしておく。

キツネノボタンの仲間は、葉は1~2回3出ないし羽状3出の複葉で、花は比較的小さく、花床には剛毛があり、がく片は反曲し、花卉は楕円形で、蜜腺は小片で被れる。閉果の上部には腹縫線、または背腹両縫線の両側に稜があり、多少とも発達した嘴をもつ。

この群に属する日本産の種には、ここでのべたもののほか、コキツネノボタン *R. chinensis* BUNGE、オトコゼリ *R. tachiroei* FRANCH. et SAVAT., シマキツネノボタン *R. sieboldi* MIQ., ヒメキツネノボタン *R. yaegatakenensis* MASAM., ツルキツネノボタン *R. hakkodensis* NAKAI がある。

Ranunculus cantoniensis group in Japan

Ranunculus tachiroei FRANCH. et SAVAT. Enum. P. Jap. 2 : 267 (1877) - HUTH, in Bull. Herb. Boiss. 5 : 1082 (1897) - TAMURA, in Acta Phytotax. Geobot. 16 : 111 (1956).

R. chinensis (non BUNGE) LÉV. in Bull. Acad. Inter. Géogr. Bot. 9 : 216 (1900) p. p. ; in Bull. Acad. Inter. Géogr. Bot. 11 : 298 (1902).

- R. japonicus* var. *tachiroei* (FRANCH. et SAVAT.) FIN. et GAGNEP. in Bull. Soc. Bot. Fr. 51 : 309 (1904).
- R. petiolatus* LÉV. et VNT. in Bull. Soc. Bot. Fr. 53 : 389 (1906) [Insula Nippon, basi Komagatake, VII 1905, U. FAURIE 6958 lectotype & isotype in KYO].
- R. cantoniensis* (non DC.) LAUENER et GREEN, in Not. Roy. Bot. Gard. Edinb. 23 : 587 (1961), p. p.
- Distr.** Honshu, Korea & NE. China.
- Ranunculus chinensis*** BUNGE, Enum. Pl. Chin. Bor. 3 (1833) - HUTH, in Bull. Herb. BOISS. 5:1081(1897) ²p. - H. BOISS. in Bull. Herb. BOISS. 7 : 595 (1899) - LÉV. in Bull. Acad. Inter. Géogr. Bot. 9 : 216 (1900), p. p. - HAND.-M.ZT. Symb. Sin. 7 : 305 (1931) ; in Acta Hort. Gotob. 13 : 165 (1939).
- R. pennsylvanicus* (non L.) FIN. et GAGNEP. in Bull. Soc. Bot. Fr. 51 : 309(1904)
- R. brachyrhynchus* CHIEN, in Rhodora 18 : 189 (1916), p. p.
- R. cantoniensis* (non DC.) MERR. in Trans. Amer. Phil. Soc. n. s. 24-2 : 155 (1935), p. p.
- Distr.** Hokkaido, Honshu, Kyushu, Korea, Ussuri, Dauria, NE., N. & M. China, Indo-China, NE. India & Himalaya.
- Ranunculus cantoniensis*** DC. Prodr. 1 : 43 (1824) - MERRILL, in Trans. Amer. Phil. Soc. n. s. 24-2 : 155 (1935), p. p. - HARA, in Jour. Jap. Bot. 18 : 459 (1942) - LAUENER et GREEN, in Not. Roy. Bot. Gard. Edinb. 23 : 587 (1961), p. p.
- Hecatonia pilosa* LOUR. FI Cochich. 371 (1793) - DC. Syst. Nat. 1 : 228 (1818).
- R. ternatus* (non THUNB.) FRANCH. et SAVAT. Enum. Pl. Jap. 1 : 7 (1874) - HUTH, in Bull. Herb. BOISS. 5 : 1081 (1897), p. p.
- R. chinensis* (non BUNGE) HUTH, l. c. 1081 (1897), p. p.
- R. ternatus* var. *hirsutus* H. BOISS. in Bull. Herb. BOISS. 7 : 594 (1899), p. p.
- R. vernyi* var. *hirsutus* (H. BOISS.) KOIDZ. FI. Symb. Or. - Asiat. 78 (1930).
- R. ternatus* var. *glaber* H. BOISS. l. c. 594 (1899), p. p.
- R. japonicus* (non LANGSD. ex FISCH.) FIN. et GAGNEP. in Bull. Soc. Bot. Fr. 51 : 308 (1904), p. p.
- R. vernyi* var. *japonius* (non LANGSD. ex FISCH.) NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo 42 : 20 (1928).
- R. brachyrhynchus* CHIEN, in Rhodora 18 : 189 (1916), p. p.
- R. vernyi* (non FRANCH. et SAVAT.) KOIDZ. in Bot. Mag. Tokyo 39 : 314 (1925), p. p.
- R. langsdorffii* (non SPRENG.) HAND. - M.ZT. Symb. Sin. 7 : 305 (1931) p. p.

- R. polycephalus* MAKINO, in Jour. Jap. Bot. 7 : 31 (1931).
Distr. Honshu, Shikoku, Kyushu, Bonin, S. Korea, Taiwan, C & S. Cont. China.
Ranunculus silerifolius LÉV. in FEDDE, Rep. Sp. Nov. 7 : 257 (1909).
R. ternatus (non THUNB) HUTH, in Bull. Herb. Boiss. 5 : 1081 (1897), p. p.
R. vernyi FRANCH. et SAV. at. Enum. Pl. Jap. 1 : 8 (1874), nom. nud. & 2 : 266 (1877), nom. delend. - KOIDZ. in Bot. Mag. Tokyo 39 : 314 (1925), p. p. ; FL. Symb. Or.-Asiat. 78 (1930).
R. ternatus var. *hirsutus* H. BOISS. in Bull. Herb. Boiss. 7 : 594 (1899), p. p. - LÉV. in Bull. Acad. Inter. Géogr. Bot. 9 : 216 (1900), ut *β. hirsutus*.
R. ternatus var. *glaber* H. BOISS. in Bull. BOISS. 7 : 594 (1899), p. p. - LÉV. in Bull. Acad. Int. Géogr. Bot. 9 : 216 (1900), ut *α. glaber* - OHWI, Fl. Jap. ed. 1 : 526 (1953)
R. vernyi var. *glaber* NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo 42 : 19 (1928) - HARA, in Bot. Mag. Tokyo 49 : 12 (1935).
R. glaber (H. BOISS.) MAKINO, in Jour. Jap. Bot. 7 : 31 (1931).
R. quelpaertensis var. *glaber* (H. BOISS.) HARA, in Jour. Jap. Bot. 18 : 460 (1942).
R. hakkodensis var. *glaber* (H. BOISS.) OHWI et OKUYAMA, in Jour. Jap. Bot. 29 : 368 (1954).
R. repens (non L.) LÉV. in Bull. Acad. Inter. Géogr. Bot. 9 : 216 (1900) p. p.
R. japonicus (non LANGSD. ex FISCH.) FIN. et GAGNEP. In Bull. Soc. Bot. Fr. 51 : 308 (1904), p. p.
R. repens var. *quelpaertensis* LÉV. in FEDDE, Rep. Sp. Nov. 7 : 101 (1909).
R. quelpaertensis (LÉV.) NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo 27 : [165]& 128 (1913) - HARA, in Jour. Jap. Bot. 18 : 459 (1942) & 30 : 323 (1955) - LAUENER et GREEN, in Notes Roy. Bot. Gard. Eard. Edinb. 23 : 589 (1961).
R. vernyi var. *quelpaertensis* (LÉV.) NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo 42 : 21(1928)-HARA, in Bot. Mag. Tokyo 49 : 13 (1935).
R. ternatus var. *quelpaertensis* (LÉV.) OHWI, Fl. Jap. ed. 1 : 526 (1953), comb. inval. ; in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo no. 33 : 72 (1953).
R. hakkodensis var. *quelpaertensis* (LÉV.) OHWI et OKUYAMA, Jour. Jap. Bot 29 : 368 (1954).
R. fibrosus f. *sundaicus* BACKER, Schoolfl. Java 8 (1911).
R. sundaicus (BACKER) EICHLER, in Bibl. Bot. Heft 124 : 94 (1958).
R. vernyi var. *prostratus* NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo 42 : 21 (1928).
R. quelpaertensis var. *glaber* f. *prostratus* (NAKAI) HARA, in Jour. Jap. Bot. 18 : 460 (1942).

R. langsдорffii (non SPRENG.) HAND.-MZT. Symb. Sin. 7 : 305 (1931), p. p.
R. cantoniensis (non DC.) MERR. in Trans. Amer. Phil. Soc. n. s. 24 - 2 : 155 (1935), p. p. - LAUENER, in Not. Roy. Bot. Gard. Edinb. 23 : 587 (1961), p. p.
R. iriomotensis MASAM. in Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa 29 : 62 (1939).

Distr. Japan, Korea, Taiwan, Cont. China, Indo-China, Bhutan, Assam, Sumatra & Java.

Ranunculus yaegatakensis MASAM. in Bot. Mag. Tokyo 43 : 251 (1929).

R. ternatus var. *yaegatakensis* (MASAM.) OHWI, Fl. Jap. ed. 1 : 526 (1953), comb. inval. ; in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo no. 33 : 72 (1953).

R. hakkodensis var. *yaegatakensis* (MASAM.) OHWI et OKUYAMA, in Jour. Jap. Bot. 29 : 369 (1954).

R. quelpaertensis var. *yaegatakensis* (MASAM.) OHWI, Fl. Jap. ed. 2 : 611 (1965), comb. inval.

Distr. Kyushu : Isl. Yaku.

Ranunculus sieboldi MIQ. in Ann. Mus. Bot. Lugd.-Batav. 3 : 5 (1867) - FRANCH. et SAVAT., Enum. Pl. Jap. 1 : 8 (1874) - FORB. et HEMSL. in Jour. Lin. Soc. Bot. 23 : 16 (1886) - HUTH, in Bull. herb. BOISS. 5 : 1081 (1897) - MAKINO, in Bot. Mag. Tokyo 25 : 9 (1911) - HAND.-MZT. Symb. Sin. 7 : 302 (1931) ; in Acta Hort. Gotob. 13 : 166 (1939) - KOIDZ. in Acta Phytotax. Geobot. 10 : 143 (1941) - OHWI, in Jour. Jap. Bot. 29 : 369 (1954).

R. japonicus LANGSD. ex FISCH. in DC. Prodr. 1 : 38 (1824) - FIN. et GAGNEP. in Bull. Soc. Bot. Fr. 51 : 308 (1904) p. p.

R. langsдорffii SPRENG. Syst. Veg. 2 : 652 (1825).

R. arcuans CHIEN, in Rhodora 18 : 190 (1916).

R. sieboldi var. *arcuans* (CHIEN) HARA in Jour. Jap. Bot. 18 : 458 (1942).

R. cantoniensis (non DC.) MERR. in TRANS. Amer. Phil. Soc. n. s. 24 - 2 : 155 (1935), p. p.

Distr. W. Honshu, Shikoku, Kyushu, Ryukyu, Taiwan, C. & S. Cont. China & Indo-China.

Ranunculus hakkodensis NAKAI, in Bot. Mag. Tokyo 26 : 324 (1912) - HARA, in Jour. Jap. Bot. 30 : 323 (1955).

R. ternatus var. *hirsutus* H. BOISS. in Bull. Herb. Boiss. 7 : 594 (1899), p. p.

R. ternatus var. *glaber* H. BOISS. in l. c. 594 (1899), p. p.

R. japonicus (non LANGSD. ex FISCH.) FIN. et GAGNEP. in Bull. Soc. Bot. Fr. 51 : 308 (1904) p. p.

Distr. Honshu : Provs. Mutsu, Rikuchu, Uzen, Iwashiro. & Shinano.